

パナマ点描

小村 幸二郎 (元所員)

Kohjiroh KOMURA

メキシコシティ瞥見

夜空から見るメキシコシティは 息をのむほどの光の海の中にあった。世界各地の大都会の夜の姿を空から見た経験は数えきれないほどあるが これほど美しい夜景をもつ都会はそれほど多くはない。 海拔 2,240m 人口およそ 1,200 万人のメキシコシティは 北アメリカでは最も古い歴史をもつ都である。 機内放送でもメヒコと呼ばれる通り この大都会は 一般にはメヒコと呼ばれているが 正式の名はメヒコ・デー・エフェまたは シウダ・デ・メヒコである。 メキシコの表玄関にあたるベント・フェレス空港のビルは 床に敷きつめられた美しい大理石がよく見えないほど 混雑している。

10月下旬 メキシコシティの午後10時 様々な光の中を 冷たい風が吹きぬけてゆく。

空港に到着してから丁度1時間の後 レフォルマ大通りに建つ独立記念塔の北側にあるマリア・イサベル・シエラント・ホテルに着落した。 案内された部屋はスイートルームらしく 一人で泊るにはいささか広すぎる。

ロサンゼルスからの機内で パン・七面鳥・サラダ・ケーキ・チョコレートを食べたもの それから3時間ばかり過ぎた頃には もう 胃袋の中には 何も残ってはいない。 着替えもせず 顔と手を洗っただけで 同僚2人と夜の町へ出かけた。 目的地は海鮮料理屋である。 メキシコシティでは上等の店らしく 着落した構えの内部では 数組の紳士淑女が 静かに食事を楽しんでいる。 やがて カキや貝などが運ばれてきた。 新鮮で生のまま食べるものらしいが カキ氷の上に盛られているのが何となく気になる。 まずパンで胃袋を満たし ささやかなその隙間に カキと貝をつめこむことにした。 こういう料理を日本で出されたならば まず間違はなく なま物だけを心ゆくまで食べることだろうが ここは海から離れた外国の高原の町 しかも 日本を離れて最初の宿泊地とあっては 注意するにこしたことはない。

かなり古びたタクシーを拾って ガリバルディ広場へ向った。 この広場は通称マリアッチ広場と呼ばれ 夜の9時頃になると マリアッチ・バンドが続々と集ってくる。 数人の楽士がバンドを編成して客から声がかかるのを待っているが ほとんどのバンドが手持ぶさた

のようである。日本で6カ月の演奏旅行をしたという3人組のバンドに 演奏を頼んだ。 3曲を精一杯に歌いそして演奏した報酬は約600円であった。 夜更けのマリアッチ広場には多勢の人がたむろしてはいたが 冷たい風に手がかじかむのか ギターを背にして手をこすり合わせる楽士の姿には 陽気なメキシコ人は感じられなかった。 19世紀の中葉 フランスのマクシミリアン皇帝の統治下にあったメキシコでは フランス人の結婚式にはメキシコ人の楽士がお祝いの演奏をしたということである。 ギター・トランペット・バイオリンという奇妙な取り合せの楽器で演奏する楽団であるマリアッチという名は フランス語のマリアージュ(結婚)という言葉が訛ったものといわれている。 精一杯に演奏してくれた3人組の生真面目さに感謝して別れたものの胸の片隅には 何故か 満たされない何かがあった。 金糸銀糸で飾った服とソンプレロを身につけた楽士達の演奏をマリアッチ広場で聞いてみたいという以前からの望みはかなえられたもの 満たされない何かがある理由は その場では想い出せなかった。 そして ホテルへ帰る途中 その理由を ようやく想い出した。 その理由とはマヤ音楽に深い係わりをもつユカタン歌曲やインディアン・ハーブを使って演奏するソネス・ハローチョス(ベラルス州の郷土音楽)をマリアッチ広場で聞きたいという古くからの願望が半分しかかなえられなかったことである。 しかし よく考えてみれば その願いがかなえられなかったのはスペイン語に弱い自分の無学のせいであり諦めるしかない。 帰り着いたホテルの部屋は ほどよいあたたかさであった。 午前2時 やわらかなベッドに入ったもの 冷たい夜風に吹かれて手をこすり合せていた楽士の姿が想い出されて なかなか寝つけない。

一夜明けて メキシコシティは快晴であった。 午前中はフリーとあって メキシコシティの姿をできるだけ見て回ることにした。 6時半に起きて慌ただしく朝食をすませ 8時には 国立宮殿近くのアステカ遺跡発掘現場に着いた。 発掘されている範囲はあまり広くはないが ピラミッドのような建造物 神殿の跡らしい部分 蛇の彫刻などがアステカ王朝の名残りをとどめている。 石造遺跡を見つめながら いつの間にか 磨きあげたような石を積重ねたインカ時代の建造物とを比較し そし

て メキシコシティにアステカ王朝の遺跡がぎわめて少ないことに疑問を抱きはじめていた。

国立宮殿の裏手の細い道を抜けると 見事な石畳の広い歩道と車道があった。その歩道にすわって 白い布の上に数えるほどの飴を並べて売っている女の子が居た。青い横線の入った白いセーターに真紅のスカートを身につけたこの子は せいぜい小学校の1年生ぐらいらしい。石の上に正座し 両手をついて飴を売る少女の姿を見つめているうちに 涙がこみあげてきた。何時頃からここに座っているのか分らないが 紙で作った大きなコップの中の水は いくらか残ってはいなかった。

飴を買ってくれる通行人はいない。思わず立ちどまって 風でめくれた布でくずされた飴を20個買った。一山4個 「ムーチャス・グラシアス」 少女は かぼそい声で礼を言いながら かすかに微笑んだ。一人旅ならば 恐らく この飴を全部買ったかもしれないが そうすることがこの少女にとって最も良いことであるとは言いきれないようにも思う。それにしても 人道は広々としているというのに 車道すれすれの所に座って商うことを この少女は誰かに教えられたのだろうか。「アデイオス」と声をかけると 少女は 下を向いたまま こっくりとうなずいた。

出発の時刻を気にしながら国立人類学博物館へ向った。50kmばかり北方にあるテオティワカンの有名な遺跡を訪ずれるには時間がなく せめて アステカとマヤの文化の一端をかいま見たいという願望をささやかに満たすのがその目的であった。見学できる時間はわずか

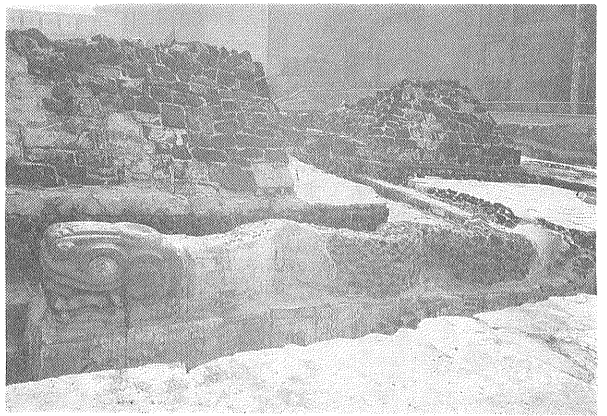


写真1 メキシコシティのアステカ遺跡発掘現場で見た蛇の彫刻。インカ帝国の遺跡にはピューマの彫刻が多くみられるが アステカの遺跡には このような蛇の彫刻が多く発見されているらしい。こうした彫刻は一般に権力または願望の象徴とみなされているらしいが 蛇にはどのようないわくがあるのだろうか。

に1時間 1日ではとても見きれないといわれる面積4.4km²のこの博物館を見学するには余りにも短かい時間ではあるが メキシコの象徴ともいわれる「太陽の石(アステカの暦石)」を見るには十分である。太陽を信仰の対象とし その運行の一助として常に生贄を捧げたといわれるアステカが生んだ石の暦とは一体どのようなものなのか 壮大な建物の中でも最も重要な部分となっているアステカとマヤの展示室へ急いだ。朝一番に見た発掘現場で1970年に発見されたといわれる太陽の石は目前にある。直径3.6m 重さ22tといわれるこの石は



写真2 飴を売る少女。国立宮殿の近くの石畳に正座し 両手をつき 頭を下げて飴を売るこの少女の姿を見た瞬間 涙があふれてきた。自分の欲望が満たされぬことに不平不満をむきだしにする人達にとって この少女の姿はどのように映るのだろうか。



写真3 太陽の石。アステカの暦石とも呼ばれるこの巨大な石の中央に位置する太陽神の舌を出した顔は いけにえを欲しがっているようで不気味である。

インディオ最後の帝国として知られているアステカの美の結晶には違いないのだろうが その中心に刻まれている太陽神を見た瞬間 思わず 背筋が寒くなった。石で作った刃物のような形をした長い舌を出す太陽神を見ていると 現代の人々にも アステカが捧げたような生贄を求めているように思えてならない。太陽神の囲りにある四つの方形の部分は既に消滅した四つの太陽を象徴していると解釈されているようだが アステカがこれに印した四つの太陽とは 一体 何を指しているのだろうか。

わずか1時間の見学ではあったが アステカやマヤの文化の一端にふれ メキシコシティの昼間の顔に接することができたように思う。メキシコを中心に栄えたこれら二つの帝国の興亡の歴史をさらに広くそして精しく探ってみたい欲望を押えるのは辛いようにも思えるが それを後日に残しておくのも一興である。

空港に着いてから出発するまでには3時間もすぎている。博物館で買い求めたアステカの資料を見ているうちに 「1325年にアステカ族が現在のメキシコシティに湖上の都を築き……」というくだりを見て 一瞬 愕然とした。アステカ遺跡の発掘現場を見学した折 その遺跡が現在の道路よりもかなり低いのを不思議に思ったが この資料から考えてみれば 現在のメキシコシティのかなりの部分は埋立地に建設されていることになる。人口1,200万人の大都会に林立する高層ビル 湖上の都アステカ時代から次第に湖が消え 現在のような大都会に変貌してきた姿を想像すると 太陽神の顔以上の恐ろしささえ感じられる。帝国の興亡と首都の変遷 そして 盛土の上に置かれた巨大な人頭の石像の厚い唇と大

きな鼻にみられるネグロイドの姿が 浮んでは消え 消えては浮んでくる。

パナマシティ

メキシコシティからパナマシティへの空の旅ははじめてである。天候はよし 空席も少々あり 下界もよく見えそうである。グアテマラからパナマまで7カ国が位置する中米地域は実に奇妙な形をしている。カリブ海へ向ってユカタン半島やホンジュラス～ニカラグアが著しく突出しているのとは対症的に 太平洋岸はやや直線的である。そして パナマの東半部は 中米と南米とに架かった太鼓橋のように カリブ海へ向って半円形に突き出している。海岸線にみられるこのような特徴は 当然のことながら 途方もなく長い地球の変貌の歴史の中で創造されたものであるが では どのような変貌の歴史を辿ったのだろうか。いわゆるプレートテクトニクスという立場からは次のように解釈できるらしい。古い時代 パナマを東端部とする中米地帯と南米大陸とは 遙かに遠く離れていた。中米諸国がのる部分はカリブ・プレート 南米大陸がのる部分は南米プレートと呼ばれ 両方とも 南西方から動いてくるフアラロン・プレートによって絶えず押されていた。そして カリブ・プレートおよび南米プレートとフアラロン・プレートとの境界にはサブダクション帯が形成され これに関係して 中米諸国や南米大陸西縁部には 安山岩質の火山活動が活発に行われた。未開発の大型ポーフィリー・銅床として注目されているパナマのセロ・コロラド銅床地区に分布する安山岩もこの時期の活動の産物で 絶対年代の測定結果によって その時期はおおよそ3,000万年前と推測されている。

人間も地球も 年をとるにつれて皺が増え 容貌が変わってゆくのは同じらしい。1,500万年ぐらいい前になると フアラロン・プレートは北東—南西方向に裂け 東側のナスカ・プレートと西側のココス・プレートとに分裂し この裂目は トランスフォーム断層という特殊な性状をもっている断層によって 階段状に切断された。トランスフォーム断層の中で特に注目されるのは ナスカ・プレートの西端の一部をなすコイバ断裂帯と呼ばれるもので セロ・コロラド銅床はその北方に位置している。コイバ断裂帯の活動は 年とともに 徐々に西方へ及び パナマ断裂帯と呼ばれる構造帯が形成された。後で述べるデービドの近くに聳えるエル・バルー火山はこのパナマ断裂帯の北方に形成されている。

このような様々の構造的な動きの他にもいろいろの現象を経験し パナマは およそ100万年前に ようやく南米大陸と地続きになった。大規模な構造の形成・発



写真4 石の首像。国立人類学博物館の庭にあるネグロイドの首像で 厚い唇 大きな目と鼻 ロボットのような戦士を彷彿させる。

達に関係した火山活動 地震の発生 陸地の移動という想像も及ばないほどの変動などがプレートテクトニクスという考え方で解釈できるということをも多くの人は疑わないだろう。だが、このような激しい変動を受けながら何故パナマの国土は何千万年もの間変形しなかったのだろうか。海岸線の形状の顕著な差異 狭長な陸地の形とほぼ平行して点在しているであろう火山そしてもしかするとカリブ・プレートとココス・プレート及びナスカ・プレートとの境界に当るサブダクション帯を示す海の色異なる部分が見えるかもしれないと眼下の光景を凝視していた。だが無情にも離陸して間もなく低くたれこめた雲にさえぎられて地上の光景を見る望みは断たれた。北米大陸と南米大陸とを結ぶ中米地帯で最も幅の狭いパナマ 中南米諸国の中でチリーと並んで美人の国として知られているコスタリカとコロンビアに挟まれているパナマ 大規模のポーフリーカッパー鉱床が採掘される時を待っているパナマ厚い雲におおわれて素顔を見せない下界には興味を抱かせる様々なものがある。腹だたくさえ思える厚い雲も 楽しみを後に残してくれるものと思えば微妙に変るその姿態が美しくさえ思えてくる。外を見てもしかたがないし 座席前のポケットに入っている航空会社のPR雑誌は写真が多くて結構楽しめそうだがスペイン語の文章ばかりのようだし だからといってとても眠れそうにない。読めなくても写真を見るだけでもある程度の時間つぶしにはなるとして その雑誌をめくりはじめた。品物の広告や観光地の宣伝ばかりのようならその雑誌を見ているうちに 英語の記事が目についた。その記事は“古い時代にパナマで稼行されていた金山で崩落事故があり 数名の坑夫が死亡したため その後間もなく休山したが 品位・鉱量ともに良好なので 近いうちに再開される”ことを伝えるものだった。座席に落ちてすぐに目についたこの雑誌の表紙の文字がすべてスペイン語で書かれていたためとくに見たいとは思わなかったが 下界が全く見えないため つい 退屈しのぎに見たことで パナマの鉱物資源の動向の一部を知ることができた。視界を完全にさえぎった雲に感謝せずばなるまい。

高度が下がりをはじめ間もなく 雨が窓を叩きはじめた。メキシコシティを出発しておよそ2時間の後 パナマ共和国の空の玄関に当るトクメン空港に到着した。国土面積7.7万km² 人口およそ213万人の国にしては中々立派な空港である。これは 多分 パナマが北米と南米との接点に位置している上に太平洋と大西洋を結ぶ通路をもっているからであろう。

入国手続を終えて外へ出ると 雨は幾分小降りになっ

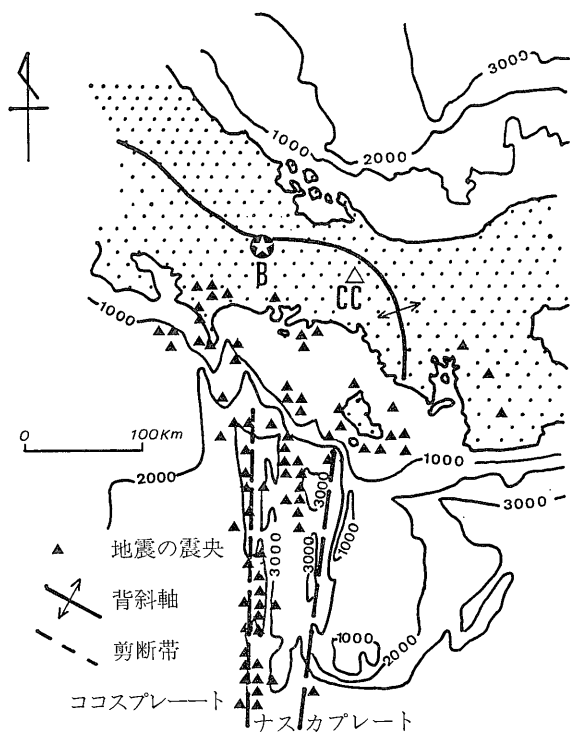


図1 パナマ西部の地質構造 (K.O. Linn 他: Geology of Panama's Cerro Colorado Porphyry Copper Deposit Fig.3 を簡略化)
 B: エル・バルー火山 CC: セロ・コロラド鉱床
 C: コルバ断断帯 P: パナマ断断帯
 打点部は陸地 数字は水深 (m)

ていた。パナマシティの中心部までおよそ30km 離れている空港付近は深い闇に包まれている。ゆるやかにうねる道に映る光が 次第に多くなってゆく。出発してから30分ばかりの後 市のほぼ中心にあるGホテルに到着した。パナマシティで最もラテンムードの強いといわれているこのホテルのロビーには客の姿はなくもの憂いメロディが流れていた。

年間を通じて 日中の気温は32℃ 夜間の気温は22℃といわれているパナマシティの夜は 雨季の最中とあって かなりむし暑い。はじめて訪ずれた国の最初の夜しかも 時刻は8時を過ぎたばかりである。太平洋とカリブ海をつなぐ運河をもつパナマシティには この両方の海で獲れる魚介類の料理で名を売っているレストランが多いにちがいない。食欲だけは人並みな上に機内食のボリュームがやや少なかったせいにか この日の夕食には 自分でも奇異に思うほどの欲望めいたものを抱いていた。だが 部屋に荷物を置くのもどかしく 外へ

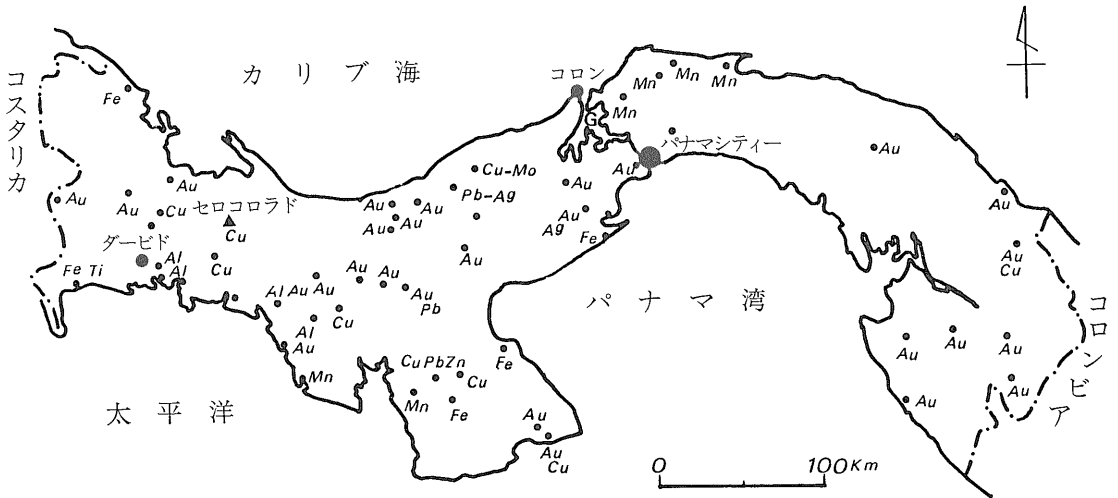


図2 パナマ鉱物資源分布概略図(島部省略)(DGRM: YACIMIENTOS MINERALES DE PANAMA より作成)
G: ガツン湖

出てみると その欲望を断ち切るように 雨が激しく降っていた。 スコールのような通り雨かもしれないが こうなると すんなりと諦める方がよい。 結局 ホテルと道路を隔ててある食堂で ささやかな夕食を終えた。 支払は米ドルである。 この国の通貨の単位はバルボアとその100分の1に相当するセンチシモスであるが この国で発行されているのは1バルボア以下の7種類の硬貨だけで紙幣はなく バルボアと米ドルは全く等価なので 米ドルがそのまま使用されているわけである。 自分の国の紙幣をもたないパナマは 独立国としてはきわめて珍しい存在であるが 何故このようなことになっているのだろうか。

雨季には一日に2〜3度スコールがやってくるということだが 早朝の空は 雨季であることが信じられないほど 澄みわたっていた。 夜の雨で汚れがすっかり洗い流されたのか 木の葉の緑色が一きわ美しく光っている。 昨夜はよく分らなかったが パナマシティは立体的な美しさを見せている。 熱帯植物の鮮やかな緑の中に建つオレンジ色の屋根と白壁の家 高層のアパート 経済的に豊かでない国であるだけに美しい町ではないかもしれないと想像していたが この想像は嬉しくはずれた。

散歩をかねて 朝食をとり外へ出てみた。 午前7時半 強い陽射しの中を 様々の肌の色の人達が意外に足早やに歩き 隙間もないほど広告だらけの大型バスは満員の客を乗せて 息苦しそうに走っている。 タクシーも走ってはいるが 日本のように同じマークをつけているタクシーは見当たらない。 もしかすると タクシーは会社経営ではなく 個人経営なのではなからうか。

肌の色も身体つきも様々に異なる人達だが 注意してみているうちに 10人のうち6〜7人が混血の人達らしいことに気がついた。 この国が かつて スペインの統治下にあったことからみれば スペイン人とインディオとの混血が最も多いのかもしれないが その他の混血の人も結構多いのかもしれない。

ホテルから7〜8分歩いた所に 日本でもなじみの深い軽食の店があった。 多分世界各地にチェーン店もっているだろうこのような店では 場所や国によって販売する飲物や食べ物の種類や値段がほとんど同じなのか または かなり異なるのか 少々興味をひかれて

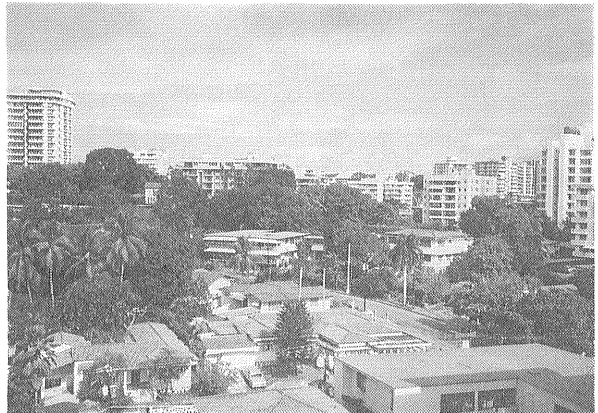


写真5 パナマシティ風景。市のほぼ中心部にあるグラナダ・ホテルから見た住宅街。熱帯樹の緑と建物の白壁 赤屋根が見事に調和して いかにも南国らしいムードに満ちている。

入ってみた。客は数えるほどしか入っていない。メニューを一通りみて オレンジジュース コーヒー トースト 煎り卵を注文してみた。値段は日本と比較してほとんど同じであった。物価がパナマと日本とは殆んど同じなのでこのようなものの値段も殆んど同じになっているのかどうか よくは分らない。

この店が面する大通りには いろんな店が並んでいるが ガラス越しに見るかぎりでは どうやら 国産品は多くないらしい。日本は世界有数の輸出国として少々ねたまれている存在であるが 概算すると パナマからの輸入額に対して パナマへの輸出額は約30倍になっている。パナマと各国との間にこれほどの貿易収支の差異があるとは思えないが 世界の市場に名を連ねるほどの産業もないらしいので 全体としてはかなりの入超になっているように思える。恐らく その主な理由は 国土の大部分が熱帯雨林におおわれた 海拔 900~1,500m の山岳地帯で平地が少なく 土地の利用という面で難点があるために農業その他の産業が育成されにくく また 工業の発展に必要な諸条件が満たされにくいことなどであろう。

さんさんとふり注ぐ強い陽射しの中に浮ぶ雨上りのパナマシティの美しさは 風景画の素材としては絶好である。だが 現在の美しいパナマシティが誕生するまでの歴史には 悲しい出来事も秘められている。

現在のパナマに最初の足跡を残したのは コロンブスの探検隊に参加していたスペイン人のバステイダスである。それから9年を経た1510年 バルボアという男がカリブ海の沿岸地帯ではじめての植民都市であるダリ

エン市を建設した。バルボアは ダリエンを拠点として活動し やがて 南へ南へと進むうちに海岸に辿りついた。その岸辺から見る海は 水平線の果まで おだやかに波うっていた。バルボアは 果しないおだやかなその大海原を見て きっと 驚喜したことだろう。あくまでもおだやかなその大海を太平洋と名付けたバルボアらは その沿岸地帯が気候風土に恵まれ 生活環境としてはダリエン市よりも秀れていると察した。そして この地に都市造りをはじめ 1519年にそれを完成した。9年という歳月または9という数字は当時のスペインでは何か特別の意味をもっていたのか または 偶然の一致か バステイダスがパナマに第1歩をしるしてから二つの都市が完成するまでには 全く同じく それぞれ9年が過ぎている。その当時の海辺には多くの魚が群遊していたのか バルボアらは この新しい港町をインディオの言葉で「漁師」とか「魚の多い所」を意味するといわれるパナマと名付けた。

気候にも海の幸などにも恵まれたこの新しい港町は 日を追って 活気づいていった。その主な理由は 生活環境としての良さ 南米大陸侵攻を企図するスペインの拠点 そして 略奪した財宝の集積・出荷地への変貌などであったように想像される。文字をもたないとはいえ きらびやかな文化を育くんだインカ帝国の金銀財宝の多くも スペイン人によって 恐らく このパナマからスペイン本国へ積出されたのであろう。しかし いつの世にも 富める者がその富を永劫に保ったためではなく 力を誇示した者は力に屈服するというめぐり合せがある。広い領土と多くの富を手中にしたスペインの一つの拠点ともいべきこの海辺の都は 勝者の奢りが過ぎたせいか または 余りの豊かさのせいか その隙をねらう者の格好の標的となった。そして 1671年 この都は モーガンを頭目とする海賊の襲撃にさらされ 瞬時のうちに廃墟と化した。

現在のパナマシティから 8 km ばかり離れたこの旧パナマシティには おだやかな海風が吹き渡り 働き疲れた太陽の弱々しい光を受けて 往時の建物の名残りが影を落していた。石造りの残骸を背に 無心にたわむれる幼児の姿が妙に気をひく夕暮れである。

夕食前の一時を惜しんで 散歩に出てみた。近くの商店にもホテルにもネオンサインが輝やいてはいるが 陽気なことでは定評のある中南米の夜にしては余りにも静かで暗い感じである。もっともここは長い船旅を終えた人達が一時の憩をとる港町 紫煙と強烈な酒の香りと嬌声に満ちた所もあるのかもしれないが 少なくともこのホテル付近は そうした所があるような環境ではなさそうである。いろんな店が並んでいるゆるやかな坂



写真6 旧パナマシティ。太平洋岸に建設されたパナマシティは 海賊に襲撃されて廃墟となった。今も当時の建築技術と繁栄ぶりを忍ばせる建物が残っており市民の憩の場となっている。

をのぼる時 どの店からかよくは分らないが タンゴのリズムが流れてきた。時には激しく 時には消え入り そうな歌声と楽の音に 南国の夜は情熱的に更けてゆくのだろうか 一人とぼとぼと歩いていると 何故か 血をたぎらせるはずのメロディに 気が滅入っていくようにさえ思えてくる。情緒豊かな南国の夜は エトランジェを慰めもするし また 一しお佻しさを強いることもあるらしい。

大通りからそれて小高い丘の上に出た。大通りにある商店街にはネオンサインが美しく燈っているのだから 高い樹木にかくれてまったく見えない。丘の頂上付近の住宅街は全く静かであった。多分 夕食の時刻だからだろう。この国の人達の約65%は混血で 黒人が13% 白人が11% インディオが3%ぐらいといわれているが これらの人達の平均的な家庭では どのようなメニューの夕食が食膳に上るのだろうか。平地の少ないこの国では 労働人口の約30%が米ヤトウモロコシやマニオクや果実などの栽培を主とする農業に従事しているらしいが 多種多様の食糧品が店頭の大部分を占めているらしいことから察すると 国内の生産量は需要量を満たすにはほど遠いように思われる。家族がみんな集ってゆっくりと語り合える夕食の膳に 海老や魚などの豊かな海の幸が並んでいるのか または 肉料理が中心になっているのか 通りすがりの人にはもちろん分るはずがない。だが 数少ない日本人居住者のために日本食を輸入販売している店があるそうだから 新鮮な魚介類にことかかないここでは 日本人の家庭の夕食には日本で生活する場合よりも美味しいものが食膳にぎわしているのかもしれない。

ゆっくりと歩いたにしては結構汗をかいた。2〜3度コーヒーを飲み立寄ったスナックには 客もあまり居ないらしい。日本人が少ないので顔を覚えていたのか 店の中を覗きこんだとたんに振返ったウエイトレスが白い歯を見せた。

ホテルのレストランには 変りばえのしないスローテンポの曲が流れていた。客の姿もちらほらで ポーイも手持ちぶさたらしい。廊下の突当りにあるカジノは 鉄火場と化すにはまだ時刻が早すぎるのか 静まりかえっていた。

パナマ運河

強い陽射しに光る家並を 潮の香りをのせた風が吹きぬけてゆく。北通りに建っている大統領官邸は 植民地だった頃のスペイン総督の住居だったらしい。そのすぐ近くに建っている旧国立劇場とともに 実に堂々とした建造物である。この付近は比較的早く町造りが行われたらしく 狭い道路の両側には 低層の家が軒を連ねている。決して上等の家ではないが 潮風になぶられながらも長い間耐えてきた歴史の重みのようなものを感じさせる風情がある。海岸へ出てみると 丁度干潮らしく 遠浅の浜には 無数の石の塊が転ってみえる。潮干狩をしている人の姿が全く見えないのは アサリや蛤や巻貝などがいないせいか または このようなものを食べる習慣がないので取らないせいだろうか よく分らない。遠く見える海岸近くの高層の建物群は高級住宅らしい。眺望のよい海辺には孫の手をひく老人の姿があった。

夕方ダービドへ行く飛行機の出発に間にあうようであればパナマ運河を見たいという願望が どうやら かなえられそうになった。快晴無風のその日のパナマシティの景観は 一きわ色鮮やかで 強い陽射しの中に光っていた。ゆるくうねる道路沿いに茂る熱帯の巨木の下に咲き乱れる色とりどりの花 行き交う自動車の少ない郊外の道路のドライブは中々楽しいものである。途中でセルフサービスの食堂で昼食をとり 美しく着飾ったインディオの女性が商う民芸品を見物して パナマ運河の太平洋側の最初の閘門があるミラフローレス・ロックへ向った。

立派な道路に沿って建っている民家は上等ではないが 道路からやや奥まった所に建っている白い大きな家は 広大な芝生の庭や色とりどりの花が咲き乱れる花壇とともに 一きわ目立つ。どこの町にもどこの国にも 豊かな生活を送る人とそうでない人がいるものだが この素晴らしい住宅群と今にもこわれそうな住宅とが一つの視野に入ってくるのはどういう訳だろう。その決定的

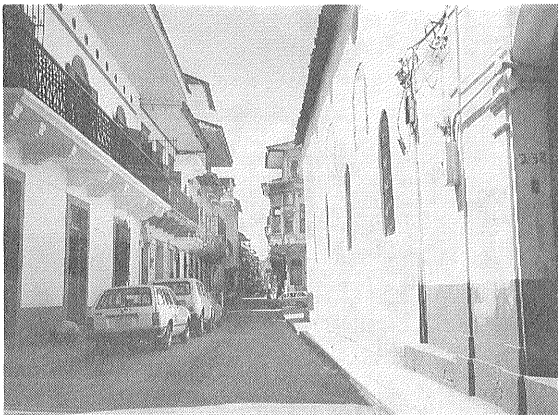


写真7 大統領官邸付近の光景。この付近にはスペイン統治当時の家が残っている。グラナダ・ホテル付近とことなって 道路の幅は狭く 家も低層である。

な理由を知るよしもないが この国の歴史に深く刻みこまれたパナマ運河建設にまつわることだけは確かなようである。

紅海と地中海とを結ぶスエズ運河は エジプトやヨーロッパ諸国などに 輸送費の軽減や船の運行日数の短縮などと関連して 経済的に大きな利益を生み出してきた。この運河を建設したフランス人のレセップスは 南米大陸最南端のホーン岬の難所を通らざるをえなかった太平洋～大西洋間の航路の短縮を願った人々の意を受けて 1878年に パナマ運河の建設に着手した。太平洋と大西洋(カリブ海)とを最短距離で結ぶこの運河の完成は 世界の人々の渴望の的であった。しかし レセップスの情熱も鍛えぬかれた男たちの体力も 猖獗をきわめた黄熱病やマラリアには勝てず 着工して10年の後 すべての作業は完全に放棄された。スエズ運河の建設に成功したレセップスがパナマ運河の建設の青写真をどのように画いていたのか知ることはできない。しかし 乾燥しきって風土病らしいものもない砂漠の国エジプトと 高温多湿の条件下にある低地帯のパナマ地峡とでは 少なくとも 作業能率や安定した労働力の確保と維持という面では 極端に異なるにちがいないが このような相違について 着工前にどの程度の情報が得られていたのだろうか。夢破れたレセップスとその協力者たちの無念さは ほかの人には到底分らないだろう。

1903年 パナマが アメリカの助力を得て コロンビアから独立したのを契機として 再び 運河の建設工事が再開されることになり その着工に先だって パナマとアメリカとの間に いわゆるパナマ運河条約が締結された。そしてアメリカは この条約によって 運河

の兩岸 8 km の間に自国の領土に対すると殆んど同様の権利を得た。延長 64km の運河は1914年に開通し 1920年7月12日から一般船舶が通過できるようになった。

車窓からみえた美しい家も庭も 実は この条約によってアメリカが保持している区域内のものであった。この運河の管理・維持などはアメリカの運河会社によって行われているということである。この運河を通るアメリカの船も数多いと思われるが 一体この運河を通る船は 通過料としてどのくらい払っているのだろうか。この運河でパナマが得てきたものは少なくなかったことだろうが 一方 自国を通るこの運河の管理運営が意のままにならないといういらだちもあったことだろう。だが こうした多くのことも 2000年以降はこの運河関係の権利がすべてパナマに返還されることを定めた1977年締結の新しい条約によって 実質的に解消されることになる。恐らく この時を迎えるまでは 運河の管理や通過料などについて パナマとアメリカとの間には或程度の意見の相異が続くことだろう。

太平洋側の第1の閘門があるミラフローレス・ロックは 太平洋側のパナマ運河の見学地になっている。車窓から見える光景に様々な想いを寄せているうちに このミラフローレス・ロックに到着した。天気はよし さぞ多勢の見物客が居るだろうと予想していたのに 見物客は意外に少なかった。時刻によっては運河だけを見て帰ることになるのだろうが 運よく カリブ海側からやってきた大きな貨物船が太平洋へ出る直前にここに着いた。舳先からのびた太いワイヤーロープを兩岸の電気機関車が引張ってゆっくりと走り 船は閘門の寸前で停止した。いくらなれているとはいえ 巨大な船を

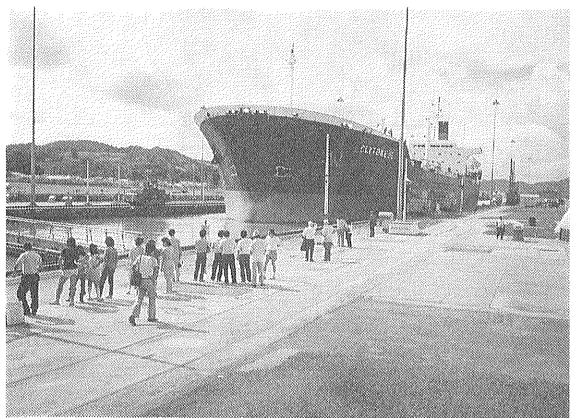


写真8 パナマ運河①。大西洋(カリブ海)側からきた貨物船が最後の閘門があるミラフローレス・ロックに入ってきた。

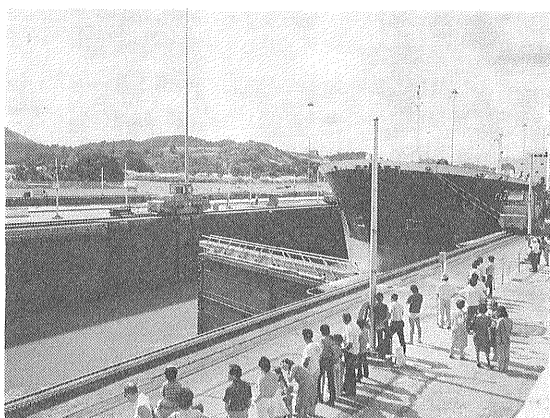


写真9 パナマ運河②。船が停っている部分の水位は太平洋の海面と同じ高さまで下り 兩岸に見られる小型の機関車が曳かれて 太平洋へ出ていく。

狭い水路の中でびたりと停めるのを見ていると その腕前のすごさには唯々敬服する。

停船してから間もなく 船が停っている部分の水位は太平洋の海水面まで下った。そして閘門が開き 船はゆっくりと太平洋へ出ていった。実に美事な一連の動きに見とれていたが こういうことが可能なのは 実はカリブ海に近く位置している人工のガツン湖のおかげである。運河の閘門で仕切られた部分の水位が上ったり下ったりするのがよく見えるように 運河のすぐ近くに2階建てでガラス張りの見学場所が設けてある。この運河のことをよく知っているらしい品の良い老人の話では「船が停止していた部分の水位を下げるために排出された水の量は80万t 下った水位は8m 水位を下げるために要した時間は8分間 パナマ運河を通過するには8時間かかる」ということだが 実際にはどうかだろうか。美事にそろった8という数字を聞いて つい 古くから日本でつかわれてきた「末広がり」「嘘の五三八」という言葉を思い出した。パナマにはこのような諺のようなものがあるかどうか知らないが もしこの数字がかなり正しいとすれば この運河を設計した人の脳裏には 最初からこの数字が刻みこまれていたのか あるいは この数字は偶然に重なりあうことになったのだろうか。ともかく 多くの人を苦悩の淵に落とし入れ 多くの犠牲を強いた大工事によって建設されたこの運河にまつわる一つの数字には 何か謎めいたものが感じられる。

めったに見る機会もない運河ということもあって 興味はつきないが いつまでも運河見物というわけにはいかない。貨物船の左舷では 上半身裸の船員が笑顔で手を振っている。運河を通る7時間か8時間がのんびりできる時間なのか神経を使う時間なのかは分からないが その表情には 狭い運河を通りすぎて間もなく太平洋へ出られるという 解放感のようなものが感じられた。もちろん船員の心情を知るてだてではないが ほっとしたような気持ちも彼等の表情に感じたのは 陽焼けしてたくましい海の男の表情は果しのない大海原の中にあつてこそ美しくは違いないと思っていたからかもしれない。

中央山脈地帯での一日

パナマ西部で最も大きい都市であるダービドへ行く飛行機は 市の中心から30km ばかり東方にあるトクメン空港の一角から飛び発つのだらうと予想していたところ その予想は完全にはずれて トクメン空港の立派な建物からはとても想像できないような小っぽけな建物がある空港から飛び発つことになっていた。待合室の床に固定されている椅子は50脚にも満たないようだし 椅子が

足りないほどの乗降客や見送りの人がいるわけでもない。やゝ丈の高い小さなカウンターがある受付場所には 褐色の肌をしたやゝ小肥りの美しい女性と やゝ色の白いひ弱そうな痩せた男が 手持ぶさたそうに立っている。椅子に腰かけてノートにメモを書き込んでいる折 ふと 人の気配を感じた。前を見ると 裾にフリルのついた真白のワンピースを着た3〜4歳の女の子が立っている。褐色の肌 ふっくらとした頬 大きな目肩までたれている漆黒の髪は白いリボンできれいにまとめられている。日本の文字に興味をもったのか またはめったに見ないかもしれないアジア人に興味をもったのか分からないが 全く愛相の良い子で じーっと見つめる表情も実に可愛い。メモをとる手を休めて抱き上げると 満面に笑を浮べた。余りの可愛さに何かをプレゼントしようと思つてはみたものゝ その待合室には売店もない。しばらく抱いて歩き回った後 そーっとおろすと その子は スキップをふみながら待合室の中を走りはじめた。間もなく カウンターの奥にある部屋から出てきた正服姿の女性に呼ばれて 走るのを止めた。旅客の子供ではないらしいし 呼ばれてすぐに走り止めたことからみると どうやら その子に声をかけた女性の娘さんらしい。3歳か4歳になると結構おしゃべりするものだが その子は 最後まで 口をきいてくれなかった。

午後5時30分 21人乗の飛行機は 機体を激しくゆすりながら離陸した。急上昇する小型機の窓越しに 幅90mから300mといわれる運河が見える。パナマ湾内には数隻の大型船が停泊しているが これらの船がカリブ海側から運河を通ってきたのか 明朝運河を通ってカリブ海へ行くのか または 太平洋岸の巡行船なのかは分からない。岸に近く繫留されている多くの船の中には 夕刻から翌朝5時までには一大不夜城となるイエーテ・フイエスタと呼ばれるヨットがあるはずだが どの船がそうなのか識別できない。雲の裂めから射していた金色の光は 間もなく 姿を消した。まだ明るいうちにダービドに到着できる時刻の飛行らしいので カリブ海と太平洋 そして 東西方向に走る中央山脈がよく見えるのを期待して窓際の席を確保したのに 飛び発つて間もなく 厚い雲が空を隙間なくおおい 下界の姿態は全く見えなくなってしまった。

特に興味をひくものが見えるわけでもなく また 飲み物や食べ物がサービスされるわけでもなく おまけに時折大きく揺れるので 快適な旅を望むことはむりである。もっとも 近距離を飛ぶ飛行機の中で飲み物や食べ物や雑誌などを期待する方が少々常識に欠けているのかもしれない。しかし とにかく 退屈な飛行機の旅で

はある。

パナマを発って丁度1時間後に到着したダービッド空港は 雨もよのせいか 既に 闇に包まれていた。人口6万人とも7万人ともいわれるこの町は コスタリカとの国境から40km ばかりしか離れていないせいだ。空港の規模はますますの大きさである。到着したばかりの客は20人ばかりしかいないわけだが 出口の所にはかなり多くの人が居た。多分 これらの人の中には 到着した客とは直接に関係のない見物人が混っているのだろう。客を待っているタクシーは数少なく どれも小型である。かなり古びたタクシーの運転手は 律義者らしく 余計なことをしゃべろうとはしない。空港から10分ばかり走った郊外にぽつんと建っているモテルは中々立派だが 泊り客が少ないのか 受付にいる美人は手もちぶさたのようである。

はるばる訪ずれたというのに 雨は止みそうにない。わざわざタクシーをよんでこの雨の中を町へ出かける気にもならず ホテルの食堂でさむやかな夕食をすませた。ようやくくつろいだ部屋はまあまあ広く バスルームもクローラーもあって特に不満もないが 何となくすっきりした気分になれないのは 閉めきってあったらしい部屋に湿気がこもっていたせいかもしれない。雨季の最中では一日だけ閉めきっていても部屋の中には湿気がこもるだろうから これもしかたがない。唯 欲をいえば この部屋に案内される少し前にエアコンディショナーを動かしてくれていたなら ベッドカバーも 枕カバーも湿っぽくなくて安眠できていたかもしれないと思う。部屋数も結構多く 食堂も中々立派で広く また

中庭にプールがあることからみて このモテルを利用する客は多いと思えるのだが この日は たまたま 宿泊客や食堂を利用する客が少なかったのかもしれない。

午前8時に迎えの自動車がくると聞いて 7時半には作業服に着換えて プールサイドで待っていた。プールの周りには色鮮やかな花が咲き乱れ 小鳥が歌い 雨上りの光を受けた朝は 甘い空気に満たされていた。

「アスタマニアーナ」という言葉で知られるスペイン語圏の国だけに 南米の人ほどにはのんびりとしていないかもしれないが 出迎えの自動車は少々遅れてくることだろうと予想して 小鳥たちの楽しそうな語らいに耳を傾けていた ところが 予想に反して 迎えの自動車は 8時丁度に ホテルの玄関に停った。迎えにきてくれた格福の良い人は どころなく垢ぬけていて実に愛相がよい。運転手とはとても思えないその姿に興味をもってみているうちに 8km ばかり離れた一軒家に到着した。そして 自動車から降りたとたん 迎えにきてくれた人に挨拶された。スポーツシャツを着ていても どころなく上品で威厳があると思っていたが その人は この国の鉱物資源の探査開発関係でも最も著名な人であった。これから アメリカン・ハイウェイを東へ向い 途中から中央山脈の頂点付近に至る道を行くこの日のスケジュールは この人の好意で実現したものである。目的地付近の大まかな状況を聞いた上で 出発することにした。雨は完全に上がったのか 点々と白い雲を浮べた青空が美しく エル・パル火山もその姿をくっきりと見せている。

平坦な舗装道路のアメリカン・ハイウェイを走っている自動車は意外に少ない。道路沿いに点在するこじんまりとした農家 白い牛の多い小さな牧場 実にのどかな田園風景ではあるが どちらかといえば山国と思えるこの国で 緑の多いこのような生活の場を造るにあたっては 想像以上の苦勞があったように思える。左手に中央山脈をみながら50分ばかり走って サン・フェリックスに到着し ここから 車は左折して狭い道に入った。

サン・フェリックスの人口は1万人とも1万5,000人ともいわれているが これはかなり広い区域にわたる全体の人口らしく サン・フェリックスの中央部を通る道路から見る限りでは 1,000人も居ないのではないかと思えるほどの家しか見当らず 店らしい店も1~2軒しか見当らない。

舗装道路が砂利道に変わり 家もとだえた。曲りくねった坂道を登りつめた所に3~4歳の女の子が立っていた。もつれあった長い髪 かなり古びた衣服 大きな瞳は何故かさみしげに見えた。雨上りの道で この子

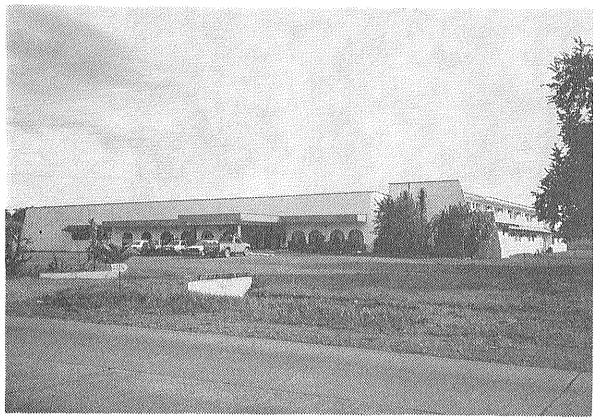


写真10 ダービッドのモテル (フィエスタ・ホテル)。コスタリカとの国境から約40km 東のダービッド市郊外にある。中庭にはプールがあり 人口6~7万人のダービッド市の人口から見ると なかなかりっぱである。

は何をして遊んでいたか分からないが、その姿を見たときに 着飾って遊び歩くことに生甲斐を感じているような連中を想い浮べて苦々しく思った。 その子と出会った所から少し奥まった所に 「インディオ保護区」と書かれた立札が立っている。 険しい山腹の深いジャングルの所々に見える小さな家がインディオの住家らしい、農耕地らしいものもなさそうなこうした山の中で インディオは どのようにして生計を保っている のだろうか。 保護区という文字から連想される様々のことが脳裏をかすめて つい 考えこんでしまったが 風雨に気を配らず現代の便利な生活を送ることができるようにしてあげる手だては旅人にはない。 ジープの運転手は 「サラリーは 480 ドル 最高の牛肉は 100g 55セント 並肉は 100g 27.5セント ガソリンは 1ℓ 52セント」と教えてくれたが この山中で生活を営んでいるインディオの 1ヶ月の生活費は幾らで それをどのようにして得ているのだろうか。 様々な連想の中に 保護区と呼ばれる一つの枠の中で生きる人の姿は鮮やかに浮びはするものゝ そうした人々の心の中は分らない。

登るにつれて 路面の荒れている部分や路肩の崩れ落ちている部分が目につくようになり 快晴だった空にはいつの間にか雲が拡がり 中央山脈の分水嶺付近は すっぱりと 厚い雲におもわれてしまった。 雨量の多いこの地帯では 未舗装の広い道路を維持するには大変な資金と労力が必要に違いないが 延長およそ 45km のこの道路は 現在まで 経済的に重要な役割を殆んど果していない。 サン・フェリックスを通り過ぎてからおおよそ 50分の後 チヤミに到着した。 ここには鉱山機器の修理工場があり 本来ならば 一日中 機械の騒音が轟いていなければならないのだけれど 今は 音を出すこともなく 活発に動く日の早い到来を待ちわびている。 工場のすぐ近くに建っている立派な宿舎も殆んど空家で比較的新しいだけに 一層佻しく感じられる。

小休止の後 更に北へ向う。 中央山脈の分水嶺付近は地形が急峻な上に特に雨量が多いので流水が強大な力をもっているのか 道路のいたみぐあいはますます激しくなっていく。 30分ばかり走って小高い峠を登りつめた所から 前方に 褐色の巨大な岩肌と一握りの家が見えた。 その岩肌は鉱床を開発するために剝土された部分であり 一握りの家は その作業が行われていた当時の宿舎や事務所や倉庫などである。 峠を一気におりてその家並に入っていた。 宿舎は 2〜3戸が使われているだけで 残りはびったりと閉ざされていた。 閉ざされた家の前に 誰が作ったのか 大きな弥次郎兵衛がぼつんと立っている。 以前は威勢よくその身体をゆすっていたであろうその弥次郎兵衛は すっかり錆びついて

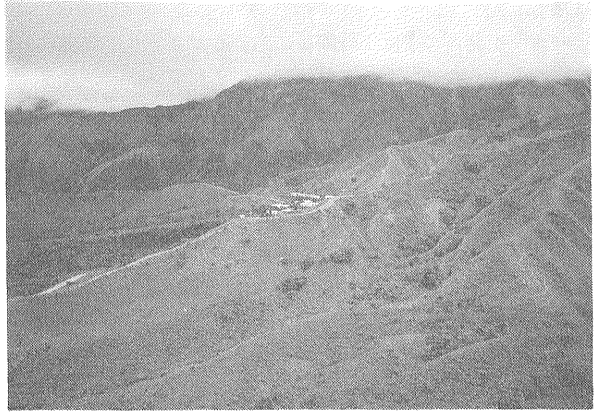


写真11 パナマの中央山脈の頂部付近の風景。 後方の岩肌はボーフィリー・カッパー鉱床の開発作業が行われた所だが 作業は休止されている。 手前の丘の上の家は事務所や宿舎など。

全く動こうとはしなかった。 この弥次郎兵衛が再び動き出すのはいつのことか このまゝ朽ち果てるとしたらあまりにも可哀相すぎる。 数少ないこの住民は 吹き渡る風の音に戦き 激しく降りしきる雨に身をすばめて 鉱山開発の鎚音が響く日を待ちつづけているのだけれど その日がいつなのか 恐らく 誰にも分るまい。

正午をとくに過ぎたものゝ 食べる物もなければ店もない山の中 更に高所を旨ざすため 早々にチャミへ引返すことにした。 チャミからの曲りくねった山道は狭く その大部分は厚い雲に閉ざされていた。 急峻な

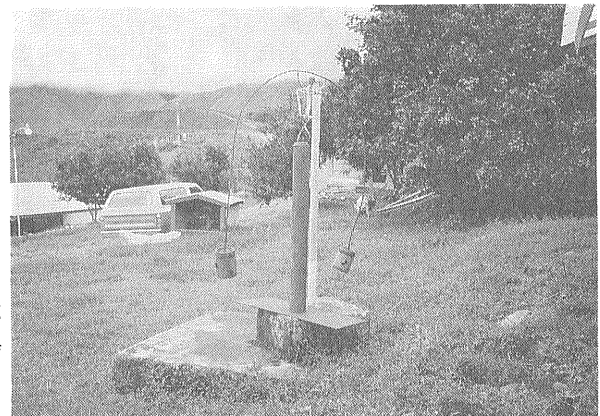


写真12 前の写真の宿舎近くで見た弥次郎兵衛。 開発作業が積極的に行われていた頃に作られたものらしくすっかり錆びついていた。 両手を一杯に広げて支えていたにちがいない人形の左手が曲っているのにさびしさを感じた。

山腹をえぐりとして造られたガードレールもない道 視界は10m足らずで ハンドルさばきを一瞬でもおろそかにすれば 間違いなく 深い谷底へ転落するだろう。

路肩の崩落に気がつくたびに背筋を寒くしながら 無事に 海拔およそ1,500mの地点に到着した。この地点から目的地までは近い。だが 空腹をがまんし 長い時間をかけてはるばるとやって来たというのに 自然はあまりにもいたづらがすぎた。道路は雨水に破壊されて自動車は通れず 重い足を引きずりながら急な坂道をおりて行ったものゝ 目的の地点から50mばかり手前道は深さ10m余りにわたってえぐりとられていた。歩きははじめた所から山腹を目的の地点へ向っておるかまたは 道の途中からトラバースするしか目的の地点に辿りつく方法はない。しかし 著るしく風化してもろくなっている岩肌と粘土帯とがむき出しになっている傾斜50°前後の山腹を しかも 雨風にうたれながらロープなしでおりるのは危険すぎる。切角来たのだから何とか挑んでみようという気はあるものゝ 結局 その地点を見ないからといってここへ来た目的が達せられないわけではないということもあって 衆議一決 退散することにした。自動車へ戻り 一息ついてふとみると 眼下にみえるはずの一握りの家も道も 厚い雲におおわれて 全く見えない。快晴だった朝の空の青さと美しい光とを見ることはもうないのではないかと思えるほどカリブ海側と太平洋側との分水嶺をなす中央山脈の頂部は 灰色の厚い雲に すっぽりとおおわれてしまった。

山をおり チャミを過ぎて山麓に着く頃 スコールのように激しく雨が降りはじめた。どうせ通り雨 1時間もすれば止むだろうと思ったのは全く間違いで 一向に止む気配がないばかりか 益々激しくなってゆく。サン・フェリックスを過ぎてパン・アメリカン・ハイウェイに出る直前にレストランがあるのに気がついて 一休みすることにした。午後4時30分 朝食を終えてから9時間30分の間一滴の飲物も一かけらの食物も口に入れていないというのに 美味しそうなスープも肉と野菜の煮込みも あまり胃袋に納まらなかった。

慌ただしく食事を終えて 最後のひとふんばりと 東へ向った。目的地は 港の建設が計画されているというおよそ30km南東方の太平洋岸である。一向に衰える気配のない雨に日暮れが早いのか 5時40分に目的地に着いた時には 辛うじて 付近の地形や海岸線を確認できる明るさであった。心残りが無いといえは嘘になるが 見るべき所は何か見ることができたことで一応よしとしなければなるまい。次第に激しくなってゆく雨の中 パンアメリカン・ハイウェイを行く自動車はほとんどいない。ヘッドライトに光る白い水の柱 対行車

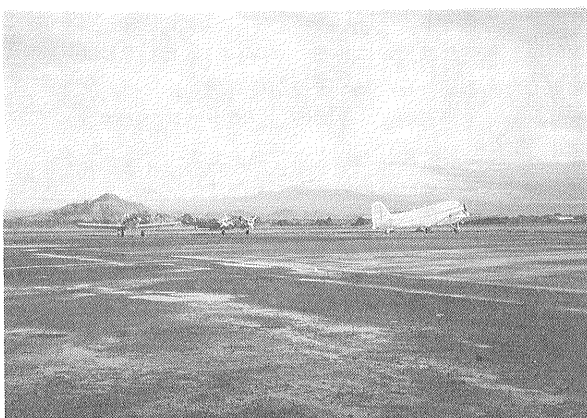


写真13 ダービッド飛行場。中央の山はエル・バルー火山、中央山脈はすっぽりと雲におおわれて見えない。

もない所で響き渡るクラクションは 運転手がこの道の隅々まで熟知していることを暗示している。長時間にわたって 路肩の崩れ落ちた曲りくねった坂道を 雲に閉ざされて視界のきかない山中の道を 激しい雨にうたれるパンアメリカン・ハイウェイを 全く嫌な顔を見せず 全く愚痴を云わずにハンドルをさばいた運転手の人柄に学ぶことの多かった一日は午後7時に終わった。湯舟で手足を思いきり伸ばしているうちに 食欲がわいてきた。あまりの静かさに窓を明けてみると あれほど激しく降りつづいていた雨は 完全に上っていた。ダービッドに来て二日目の夜そして最後の夜 美人の多いことで知られているコスタリカとの国境の町にはいろいろの土産物を商う店があるということだが 約40kmの夜道を行く気もなければゆとりもない。せめてダービッドの市内の目抜き通りぐらいいは見えておこうということで 出かけることにした。フライドチキン専門の店で腹ごしらえをして歩きははじめたものゝ 特に興味をひく物は見当らず 早々に ホテルへ帰った。

滑走路には水溜りがあった。エル・バルー火山の頂上付近は すっぽりと 雲におおわれ 新しい火山とは想像できない姿態を見せている。空港の売店では何種類かの土産物を売っている。切角来た想い出に何か一つは買いたいと見ているうちに 陶製の蛙がダービッドの代表的な土産の一つであることを知り 大きさ5cmばかりの殿様蛙が籠を背負っているのを見つけて買った。代金は600円であった。これは爪揚枝入れとして作られたのだろうが 帰国後は ガラス戸のついた本箱の中段で 歯をくいしばり 四肢をふんばっている。

珍らしい木製の搭乗券を渡して 機内に入った。中央山脈の頂上付近は雲におおわれてはいるものの 午前

8時のダービド上空には 青空がひろがっている。来る時にくらべれば天候はよさそうだし 地上も少しは見えそうである。しかし その期待も空しく パナマシティに着くまでのおよそ1時間は雲の中の飛行に終わってしまった。妙に曲ったパナマの国土もカリブ海と太平洋の青い海も 遂に 視界に入ることにはなかった。

国土面積の約80%が火山岩類におおわれているパナマでは 金 銀 銅 鉛 亜鉛 鉄 マンガン ポークサイト 石灰石 粘土 石炭などの鉱物資源が見出されているが その多くについては 経済性の評価がほとんど行われていないようである。コロンビアと国境を接するダリエン州では砂金の採取が小規模に行われており坑内事故のために休山していたエスピリツ・サント金山やアルト・デ・ラ・ミナ金山などの再開が計画されているが パナマの経済に著しく貢献すると思われる大規模鉱床の開発は実現していない。

この国で本格的採掘が熱望されていた鉱床としてはチリキ州にあるセロ・コロラド鉱床が代表的なものである。北緯 $8^{\circ}30'40''$ 西経 $81^{\circ}47'40''$ に位置するこのボーファイリー型銅鉱床は 1936年4月 パナマの石油会社の地質家ロバート・テリーによって発見され 本格的な探鉱が開始された1971年から1978年末までに 22本のボーリング総延長56,274m と延長458m の探鉱坑道の掘進が行われた。そして 東西に2,200m 南北に1,500m 深さ1,250m以上 カットオフ0.4%の銅品位で13.8億tの鉱量が把握された。このカットオフ品位で銅品位は0.78% モリブデン0.01% 金と銀は鉱石1tあたりそれぞれ 0.08g と 5.1g となり その開発には大きな期待が寄せられた。1980年には追加ボーリングと製錬試験とが計画されたが進捗せず 1983年以降は探鉱及び開発業務は休止状態にある。かつては400人ほどの人達が この鉱床が本格的に採掘される日を待ちわびながら 探鉱に汗を流していたということだが 現在は 道路の保修や機器の管理 降雨量の測定などのために20数名が現地に住居にすぎない。宿舎の前で身動きができないでいる弥次郎兵衛を作った人は もう既に この現地を去ったのであろう。この大鉱床の開発は 目ぼしい産業のないパナマにとっては 経済的に重要なプロジェクトであるばかりではなく 地域開発の一つの拠点として重要な役割を果たすはずであった。しかし 世界中に広まった銅価格の下落という鉄鎚の下に その期待はもろくもくずれ去った。この国にとっては セロ・コロラド鉱床の他にも幾つかの宝の山があるらしいが それらが真の宝の山となる日が一日も早くきて欲しい。

夜間飛行

パナマを去る日 マイアミ行の飛行機の出発は大幅に遅れ 午後2時 ようやく飛び立った。来る時には様々の期待に胸が高鳴るのをおぼえたが 今は 空しさだけがつのってくる。厚い雲が切れ カリブ海の青さが美しく光っている。およそ2時間を過ぎる頃 キューバの西端部付近が見えてきた。平らな地形 直線に見えるのは農場の境界らしい。遠浅らしい浜には 白い波がゆったりと寄せている。広々とした島に植っているのは砂糖黍か煙草だろう。晴れ渡った空の青さを溶かしこんだようなカリブ海に別れを告げる頃 大粒の雨が窓を叩きはじめた。晴天ならばきっと美しいに違いないマイアミの浜辺には 人影らしいものも見当らない。

パナマ発が大幅に遅れたため 予定の乗継ぎが不可能となり マイアミ空港で3時間も待つことになった。町を見物するには時間も十分でないし また 雨も結構降っている。こうした場合 出発を遅らせた航空会社は バスで市内見物をさせてあげるとか 軽食や飲物をサービスして旅客をなぐさめるとかぐらいはしてもよさそうなものだが こういう場合には そうした気配りは一切しなくてもいいものらしい。そういえば 出発時に搭乗券をくれた人も素っ気なかった。「出発が遅れるので マイアミでは 予約した飛行機への乗り換えは不可能です。1便おくれのロサンゼルス行ならば間にあいます」と言って そのロサンゼルス行の飛行機の予約をとってはくれたものゝ その飛行機がロサンゼルスへの直行便でないことは教えてくれなかった。

午後8時 ロサンゼルス行の飛行機は 雨のマイアミを出発した。その直後の機内放送で この飛行機がジョージア州のアトランタ経由のロサンゼルス行であることを知った。マイアミからロサンゼルスまでは4時間ぐらйдらうから パナマ時刻で午前1時頃にはホテルに入れるという皮算用は 全く狂ってしまった。マイアミからアトランタまでの所要時間は約1時間半である。安全高度に達して間もなくサービスされた夕食を終える頃には 飛行機はもう 着陸態勢に入ろうとしていた。マイアミと違って晴れてはいるが アパラチア山脈は視界に入らない。アトランタの空港ビルはかなり大きいが一直接に真中を通る広々とした通路の両側に出発口があるので 迷うことはない。広いアメリカでは 国内線はかなり遅くまで飛び回っているのだろうが 待合室にも売店にも 客は多くない。出発までのおよそ2時間 この空港でもかなり退屈した。

ロサンゼルス行の最終便は 11時35分に アトランタを離れた。空席がかなり目立つ機内には アトランタ

から乗りこんできた人は少ない。機内食を食べてからまだ3時間ぐらいいしか過ぎていないがこれも義務めいたサービスらしくまた食事が運ばれた。大して腹が空いているわけではないが途中で揺れでもしたら適当にゆきぶられて腹も空くだろうと一つ残らず胃袋に納めてしまった。

腹が一杯になるとねむくなるものらしいが当方は一向にねむくならず消燈された機内の読書用ランプを頼りに雑誌を読んでいた。乗客の多くは肘掛けを上げて横になって寝入っている。食事を終えて1時間ばかり過ぎた頃突然機体が激しく揺れはじめた。快晴らしく窓越しに多くの星が見えるものゝ地上は闇の中で光一つ見えない。何処の上空を飛んでいるのか皆目見当がつかないがアトランタを飛立つてからの時間からみてロッキー山脈にさしかかったところらしい。恐らくミシシッピー川を挟んで広がる大平原からロッキー山脈にさしかかる地域では急に気象条件が変わるのだろう。かなり長く続いた激しい揺れに目をさました人が多かったようだがエンジンの単調な音が子守歌代りにでもなるのか目をさました人達もまたすぐ寝入ったらしい。

アトランタを出発してからおよそ4時間20分ロサンゼルス空港に飛行機が完全に停止した時には時計の針は丁度午前4時ロサンゼルス時刻で午前1時を指していた。

荷物は比較的早く受取れたものゝ予約したホテルからの迎いの自動車はなかなかこない。アメリカでも蕎麦屋の出前と同じようなことがあるらしく何度か電話する毎にホテル側からは「今迎いの自動車が出ました」という返事がかえてきた。結局ホテルの部屋に入った時には2時半を過ぎメモを綴り終ったのは6時過ぎで一睡もしないまま帰国するために9時半にはホテルを出た。ロサンゼルスは快晴オリンピックに備えて大きく生れ変わった空港は一瞬のうちに視界から消えた。これから先見えるものは青い空と海だけである。

むすび

研究所設立の協議のためはじめて訪ずれたパナマの旅はまったく慌ただしく終わった。何か新しいものを造ろうとするばあいその新しいものに期待するものは多い。だが新しいものを造るばあいそれと古いものとの係わりをどのようにしたら新しいものへ無理なく移行できるのか新しいものを造るための手だてにぬかりはないか自己の力とつり合わないほど新しいものへ期待しすぎていないかなど検討熟慮すべきことは思い

がけぬほど多いものである。太平洋とカリブ海に挟まれたパナマ共和国の大部分はその狭長な国土の背骨にあたる密林におおわれた山岳地帯であり農耕や牧畜に活用できる平坦地は少ない。かつてはスペインの侵攻拠点として重要な地位を占めたパナマは近世ではパナマ運河という人工水路をもって運輸・経済上に重要な地位を占めている。しかし緑に恵まれカラフルな家並がその緑に映える美観が随所にみられる平和郷のような容貌をもってはいるものの経済的にはかなり苦しいらしい。大規模の銅鉱床が幾つかの場所で発見されはしたものゝ世界の市況はその開発を躊躇させ多くの場所で石油の探査が行われたものゝ目ぼしい油徴を発見するには至らなかった。ここ当分の間は小規模な砂金の採掘金山の再開発石灰石の採掘などが鉱物資源開発の当面の目標となるのであろう。

太平洋と大西洋の架け橋として重要な役割を果たしてきたパナマ運河は石油タンカーに代表される貨物船の大型化によって本来の役割を果たすには十分ではないと考えられおよそ20年前から第二パナマ運河建設の構想が話題になっていた。そしてこの構想は近年になって実現しそうな状況にありそれに要する経費は200億ドルに達するともいわれている。世界の最新技術を結集して行われるであろうこの大事業がいつ着手されるのかいつ完成してどちらから第1船がこの運河に入ってくるのかそしてこの運河がパナマの経済事情の好転にどのように貢献できるのかなど計画されている第二パナマ運河については注目すべきことが非常に多い。

パナマ共和国への短かな旅を通じてきわめて皮相的ながら様々なことと接しそして様々なことを考えさせられたように思う。多くの種類の鉱物資源が見出されてはいるものゝその経済性の評価は遅々として進んでいないように思える。国土のおよそ80%が火山岩類によっておおわれているこの国で今後地質鉱床の調査研究がどのように進められてゆくのかよくは分らないがすくなくともその中心的存在である鉱物資源局の施設設備や人員は十分ではないように思えた。鉱物資源関係の人々の脳裏には恐らく国内鉱山の開発と中米諸国の中で地質鉱床関係の研究の先導的役割を果たす日の姿が去来していることだろう。

かつてはスペインの侵略下にあったパナマ共和国の通貨単位はバルボアと呼ばれている。パナマシティを歩いている折バルボア通りと書かれた案内板を見た。紙幣をもたないこの国がいわば侵略者であるバルボアの名をなぜ通貨や道路の名として残しているのか異国の旅人には中々理解できそうにない。